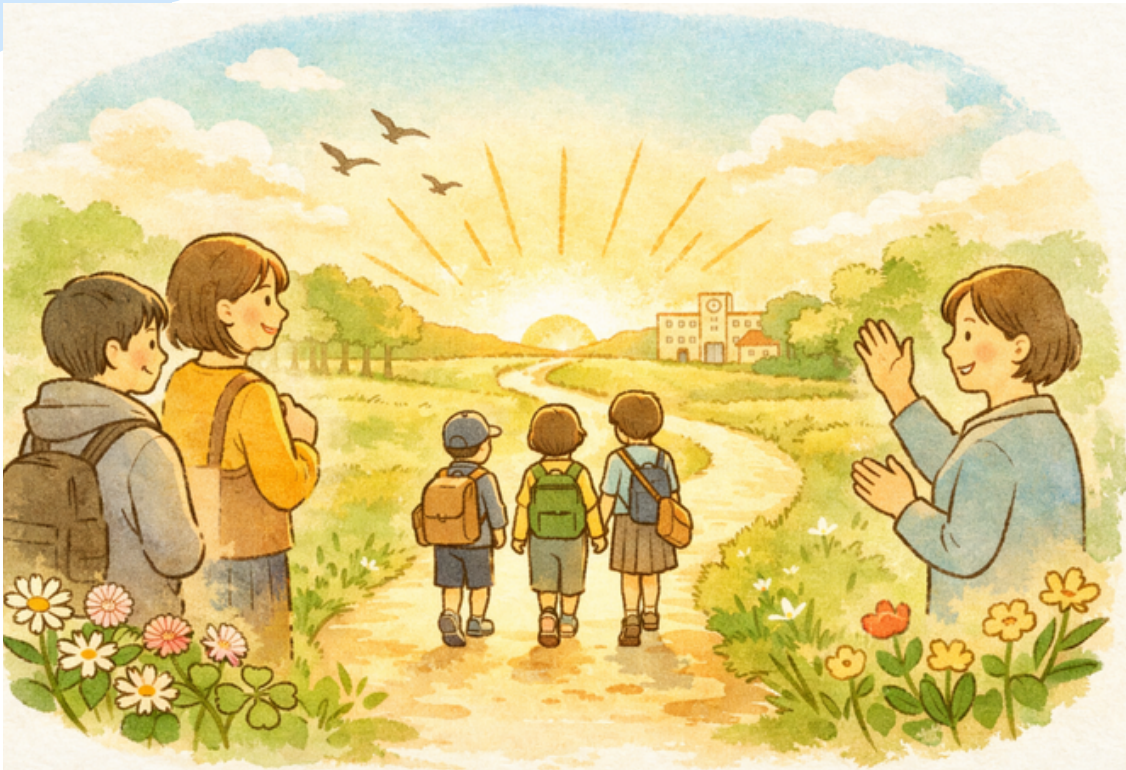


ゆりいか通信

第24号

令和8年4月



三年目の春に思うこと

ゆりいか研究会は、この4月で新体制になって3年目のスタートとなります。学校現場や社会における不登校理解を広げたいという思いから活動を続けてきました。当初は月1回の勉強会を中心としていましたが、「もう少し踏み込んだ働きかけを」という思いから、さまざまなプロジェクトや活動へと少しずつ広がってきました。

すべてが思い通りに進むわけではなく、立ち止まって考えることもありました。それでも、この活動は必要なものだと思い、温かく応援し支えてくださる方々のおかげで、一歩一歩歩みを重ねることができています。

私たちは、不登校の子どもを支える場面で、保護者や教職員、支援者の方々に「無理のないことを大切にしましょう」とお伝えしてきました。子どもたちのためと思っていても無理をしたり何かを犠牲にしていると思うような状況にいつながることがあるからです。そうした思いから、ゆりいか研究会の活動も、関わる方それぞれが無理のない形で関わ

れることを大切にしています。その一方で、思いがけないご縁をいただいたり、うれしいお声かけをいただく機会も少しずつ増えてきました。ゆりいか研究会が伝えようとしていることが、さまざまな場所に届き始めている手応えを感じています。

「こんな社会になってほしい」という思いを伝え続けてきたことが、現在の多様な活動やプロジェクトにつながっているのだと思います。当初思い描いていた形とは少し異なるかもしれませんが、思いに共感して一緒に考え、形にしていることを心強く感じていきます。

不登校の子どもたちの歩みが一歩一歩変わっていくように、私たちの活動もあらためて決まった道筋があるものではないのかもしれないかもしれません。それでも、信じて歩み続ける中で、その過程は意味のあるものとなり、それぞれにふさわしい未来へとつながっていくのだと思います。これから温かく見守り、応援していただければ幸いです。

恩庄 香織

Our Activities

「お友だちが 不登校になったら」

3月15日（日）午後、「不登校のお友だち」をテーマに、対面トークイベントを開催しました。当日は学校関係者や若者支援者、地域の大人の方々にご参加いただき、少人数ながら温かい雰囲気の中で実施することができました。登壇した3名のスタッフが、不登校のお友だちとしての悩みや当事者として感じていたこと、学校現場で見えてきた「しんどさ」について率直に語り、参加者からも多くの気づきが寄せられました。今回は中高生の参加は難しかったものの、応援フォームで寄せられた声は今後もSNSや次回イベントを通じて定めていく予定です。



提言書を 提出しました

これまでのゆりいか研究会の活動や学校現場での経験を通して見えてきた課題や可能性について、スタッフやメンターボランティアを中心に対話と整理を重ねてきました。そして、その積み重ねをもとに、このたび提言書として内容をまとめ、京都市議員の方へ提出いたしました。また、その内容を市議会質問でも取り上げていただき、私たちの実践が社会的な議論へとつながり始めていることを実感しています。なお、その様子は京都市議会予算特別委員会第2分科会の動画配信でもご覧いただけます。

提言の概要については5ページに掲載しておりますので、ぜひあわせてご覧ください。今後も現場の声を大切にしながらか、実践と発信の両面から取り組みを進めてまいります。

ゆりいか勉強会 「ゆりいかアプローチ」

3月のゆりいか勉強会で予定していた「ゆりいかアプローチの紹介」は、参加者・スタッフ双方の都合が重なり、少人数での実施が難しくなったため、今回は個別対応へと切り替えることといたしました。現在、個別での実施に向けて日程調整を進めているところです。

集まっていたものの開催は見送りとなりましたが、その分お一人ひとりの状況や思いに寄り添いながら、ゆりいかアプローチの考え方や具体的な関わり方を共有できればと考えています。関心をお持ちでありながら参加の機会を逃された方や、「気になっただけ」という方にも、個別でのご説明やご相談を承る予定ですので、どうぞお気軽にご連絡ください。

なお、次回4月のゆりいか勉強会では「教職員・支援者対象カリンバ体験会」を予定しております。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

Upcoming Events

4/11
(土)



ゆりいかタイム

「わいわいギャザリング」は4月から「ゆりいかタイム」という名称になりました。

4/12
(日)



朝市マルシェ

西陣の公園で行われる朝市に出店します。現在、お手伝いをしてくれる若者を募集中。

4/26
(日)



ゆりいか勉強会・交流会

不登校の子どもの次の一歩を考える「ゆりいかアプローチ」についてご紹介します。

5/9
(日)



ゆりいかタイム

ゲームをしたりおしゃべりしたり、自由に過ごせる時間です。一人でもお友だちとでも。



ゆりいか研究会

- ★ 教職員・若者支援者対象
- ◆ 保護者・若者支援者対象
- ♥ 高校生年代の若者対象

いずれも詳細はゆりいか研究会ウェブサイトをご覧ください。

今月のコラム

大切な宝物

皆さんにとって大切な宝物は何でしょう？今日は、私が長年大切に持っているモノのことを書きます。正確に言うところ、私の心の中に大切に持っている宝物を、忘れないようにする為に持っているモノです。前おきが長くなりしましたが、私が（宝物）を忘れないようにする為に持っている（宝物）は、小学校四、六年の時の担任の先生から頂いた、古い五百円札です。

四年生の時、青少年科学センターからもらってきた（ひよこ）を教室で飼育することになりました。黄色い小さなひよこちゃんたちは、すぐに大きい鶏になり、学年で様々な事件が発生しました。

ある日、鳥が夜中に教室内を歩き回り、次の日の朝は机の上が大変なことになって、午前中は四時間通しの学級会です。鳥は屋外の鳥小屋で飼育することになりました。また、ある朝登校すると、小屋にイタチが侵入して鳥が襲われていました。午前中は、当時はまだ校内にあっ

たゴミ焼き場で火葬して大泣きのお葬式をしました。煙突の煙は天国に行くのだと、子どもの心で思ったものでした。

一学期の夏休みに、他の鳥の世話をどうするかという演題で、また学級会です。先生は

「お世話できないので焼いて食べよう、焼き鳥は美味しい。」と提案しました。私は子ども心に、先生は鬼だ！と思いました。

その日の学級会は結論が出ず、私を含めて（生きものがかかり）の児童数名が、鶏を家庭に預かる相談をすることになりました。後日、優しい両親に承諾をもらい、四十日間自宅で世話をすることになりました。鶏を食べると言っていた先生は、丁寧に持ち帰るための段取りしてくださいました。いよいよ連れて帰る一学期の終業式の日に、先生は鶏を優しく大きな紙袋に入れて、ホチキスで入り口をとめて、電車通学の小学生の為に、改札口まで付き添ってくださいました。そして駅員さんとの会話を交わし鳥用の切符を購入入

し、さらにポケットから五百円札を出して、鶏のエサを買うようにと、私に持たせてくれたのです。私の親はそのお札は使わずに餌を用意したので、五百円札は鶏が元気に育つお守りになりました。

私にとって小学校の思い出は宝物です。担任の先生には他にも多くのことを教わりました。先生は自分が教師を志した原点でもある恩師です。しかし恥ずかしながら、心の中にある大切なものは、時々忘れてしまうのです。不思議なことに大切にしていたことを忘れた頃に、いつもこの五百円札が机の中から出てくるので、四十六年経過した現在では手帳に挟んで大切に持っています。私の五百円札は、忘れてはいけないう大切な心の宝物を思い出す大切な宝物なのです。五百円札を見たい方は声をかけてください。

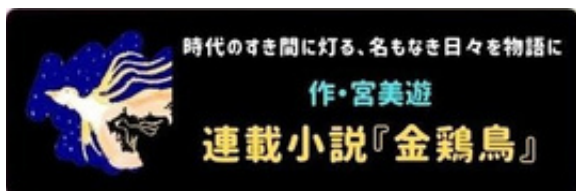
久御山町立御牧小学校

大崎 あづさ

Thanks to

THE PEOPLE WHO WARMLY SUPPORT US

支援者の皆様（順不同）



多喜誠子さま、杉本さま、宮坂 修平さま、T.OGAWAさま
クラウドファンディングおよびその他の形で協賛・寄付をしていただいたみなさまに心より感謝申し上げます。campfire community におきまして引き続きクラウドファンディングを受け付けております。
また協賛広告や直接の寄付も受け付けております。
関心をお持ちの方がいらっしゃいましたらぜひお声がけください。



ゆりいか研究会として先日、市議員さんにお渡しした提言の概要をご紹介します。

京都市に対する 高校段階の不登校・中退後の若者支援に関する提言（概要）

課題

【現状】

- ・不登校生徒数の増加
- ・高校段階の支援が制度的に空白
- ・家庭や友人に負担が集中

【課題】

- ・学校外の育ちの場が不足
- ・行政・学校・地域の連携が弱い
- ・孤立が長期化しやすい構造

【影響】

- ・社会参加の遅れ
- ・就労困難
- ・孤立リスクの固定化

提案

【支援に繋がる導線作り】

- ・学校外の育ちの場の公的整備
- ・支援情報の整理と発信
- ・地域や団体の連携体制の強化

【支援が途切れない基盤作り】

- ・支援ルートの明確化
- ・教育・福祉等の接続保障
- ・支援の継続性を支える基盤整備

【学校外支援資源との協働】

- ・地域・各団体等の協働体制強化
- ・体験・市民教育の機会拡充
- ・社会とゆるやかに繋がる選択肢

【ゆりいか研究会の立場】

当事者や保護者、学校関係者など多様な立場の声と、教職員経験者の現場の知恵を合わせ、若者支援団体とのつながりの中でまとめた市民としての提案です。

《連続小説》



金鶏鳥

宮美遊

幼少期（二十一）

大正四年のある日、信男が学校から帰ると、踏み台に乗った男が天井の方を向いて作業をしていた。

「おじさん何しとるん？」

男は手を動かしながら、不思議そうな顔をしている信男の顔を見て答えた。

「灯りを取り付けとるんや。ここにも電気が来るで」

「デンキ？」

「直（じき）に分かるに」

気になった信男が、男の横から覗き込むと、ランプより一回りも二回りも小さなガラス玉が大きな笠の下にちょこんとついているだけだった。

そしてついに弟国にも電気が通る日が来た。今日から電気が来るという噂を聞いて、みんな野良仕事を早めに終えていた。子どもたちも寺の広場から引きあげて、それぞれ電灯を見に家へ帰っていた。信男の家でも、家族が茶

の間に集まって今か今かと電気が来るのを待っていた。

次の瞬間パツと視界が白くなり、信男は思わず目を瞑（つむ）つた。それから眩しさを我慢してそっと目を開け、その光を放つ小さなガラスのボールを見つめた。

先日まではどの家でも毎晩誰かがランプに火を灯していた。しかし昨日は初めて弟国の家々にも電気が届いたため、勝手に灯りがついたのだ。当時は各家に電気のスイッチはなく、営業所が電気を流すと村中一斉に照明が点くようになっていた。

各家に電気が通った話は翌日、村中を賑わせていた。寺に集まった子どもたちもまだ興奮冷めやらぬ様子で電気の話を口々にしていたのだ。

この小説は、明治・大正・昭和と激動の時代を乗り切った実在の人物をモデルとした小説です。先行き不透明な現代を生きるヒントが得られるような気がします。ぜひこれからも楽しんでご一読ください。

絵：落葉画廊

編集後記

ゆりいか研究会では、これまで「無理のない活動」を大切にしてきました。6月28日に「不登校のお友だち」プロジェクトの大きなイベントを計画しています。私たちにとっても、少し無理をしての挑戦です。

子どもたちと関わる中で、「ちょっと無理をしてみる経験」が成長につながる場面を何度も見てきました。ただ、そうした挑戦は、何かあったときに手を差し伸べてくれる応援者の存在があつてこそ成り立つものでもあります。

今回の取り組みも、皆さまに支えていただきながら進めていきたいと考えています。引き続き、あたたかく見守っていただけましたら幸いです。（恩庄か）

おしらせ

★4月号よりメールマガジン「ゆりいか通信3.0」を始めました。これまでにご縁のあった方へ最新号概要と近況報告《ゆりいかのいま》をお届けします。ご関心のある方はぜひご連絡ください。

★令和8年3月号までのゆりいか通信をウェブサイトに掲載しました。関心おありの方にご紹介ください。